

記憶の岸边

かすかな砂の軋みとともに
足あただけの私が
また あのかへと向かふ。

岸边はいつものやうに青い。
青い、その愁ひのままに
葦はゆつくりと
私の前を歩いてゐる。

明るかつた妹たちも
後から白い旅団となつて。

記憶の藻屑が漂ふほとり、
軽やかに水を切つてゆく
平たくされた人生が
人知れず
輪紋を重ねた。

彼方から
綿毛に蔽はれた
島がひとつ
流れてくる。

もう通ふことのない岸边。

徴

それはあつた
森と空とが

あやめを失ふ真際の時に

微かに流れる葉のさやぎ

白蛾の残したあの軌跡

谷間に漂ふ冷気を貫き

一度だけ

私のために

遠くで啼いた鳥の声

ただもろさを求めて充ちてゆく

この無窮の空間に

一縷の青みもはかなく落ちて

石や草たちの

重い緘黙が開かれる

夜の中の夜

世界は海になつて

私の泳ぎを受け入れた

生まれたてのこの海で

私たちみな

心から内化を遂げた

出発

まだまどろんでゐる雀たちを
枕もとに置いたまま
あなたはひとり目覚め
旅支度を始める

やがて打ち捨てられる一輪挿しの
ほつそりとした素首
そのなかを
月が無言で昇ってくる
がらんとした
ただやはらかな

二人の夢の残り香だけが
漂つてゐる部屋を
青い砂へと変へてゆく
この世のものでない光

そこに座つてあんなにも紡ぎ合つた
二度と聞かれない言葉
情念の燃えさし

すべてを瞼の裏にをさめて
あなたはもう行くだらう
私の知らない街へ
まだ城跡に雪の残る
北方の街へ